我ら　無数の手の群

信濃忍拳己修拳流空手群　第参代師範

田中省吾

誰の為、何の為の空手か

一九六七年十月、あのめざましい暴力の復権とともに、我が信濃忍拳己修拳流空手群は、呪われたいまわしい武道より解放され、人民の武装・防衛を、自らの肉体の武器化をはかりながらせまるという目的を持つ事によって、はっきりと過去の武道の亡霊を取り去ってきた。

戦国の世、信濃に村落を築いた野盗の群は、乱世を生き抜く中で、次第に乱波集団へと様相を変え、信濃忍群を形成していった。そしてその忍群の体術と思想は、信濃忍拳として伝わり、更にそれは近世に入って沖縄の空手と結合する中から、己修拳流空手を産み出した。つまり、我が信濃忍拳己修拳流空手群は、次の二点を継承し発展させることによって形成されてきたといえる。

一、沖縄空手の思想、すなわち産みの苦しみを受け継ぐという事。常に他国の支配・抑圧を受けてきた沖縄は、薩摩の侵略によって、自由はもとより武器さえも奪われていく過程で、叛逆の炎を自らの徒手空拳に宿していった。そして、血と汗の習練は、自由の奪還と支配者打倒をめざし、一発で相手を倒さねば自分がやられるというギリギリのところから空手を産み出した。それ故、その技のひとつひとつ、その一動作毎に権力への憎悪がにじんでいる。

一、あの徳川幕権三百年を支えてきた影の存在、すなわち乱波（忍び）の陰の中に開花した体術とその思想を受け継ぐということ。では一体陰の思想とは何か？　それは一言で、いえば、戦わずして敵に勝つ事につきる。すなわち、その為の戦いを準備し実行し、最後の総力戦を勝利に導く事である。

支配者は己れの権力の座を守らんが為に、必死の努力をする。武士道と呼ばれる道はその支配の道である。安楽に支配者を支配者たらしめる道、それが武道である。つまり武道というものは、その始めから常に権力の庇護の下に発展し、だからこそブルジョアジーは、常に彼等に甘い言葉をかけ、自らに引きつけておこうとするのである。小さな、しかし恐るべき例ではあるが、全国の学園闘争の闘いの中で、いわゆる武道部と称される輩がこぞって学園支配者である学校当局の御用機関・学内機動隊として働いたことなどをみても明らかであろう。我々が恐れなければならないのは、そして怒りを叩きつけねばならないのは、「人間の真理探究の為」とか「人格形成の為」等と一様な文句を並べ、一様な制服に身を包み、体制の甘いみつによだれをたらし、支配者にとって不都合な人間や集団に襲いかかり、自分達の武力をぶっつけ武道をなのっている輩である。

我々は権力への憎悪でドロドロした空手を、決して体制の手先に使わせてはならない。勝共大会の後援団体に名を連ねた日本空手道連盟や、三菱や水俣病のチッソ株主総会で患者にまで殴りかかり、暴虐の限りをつくした空手有段者や、空手部部員、空手部を絶対に許してはならない。我々の沈黙が、拓大空手同好会＝拓忍会の安生君虐殺を、そしてあの日大アウシュビッツの中で戦闘的に戦い抜いてきた中村君虐殺を黙認してきたことを絶対に忘れてはならない。

人民はすべて武装し自衛せねばならない。その武装を解かれた時、最後の抵抗の武器として、空手はある。

（信濃忍拳己修拳流空手群への招待状より）

＊

はじめてこの集団（流派）の存在を知った人達はほとんどがまずびっくりするであろう。それほど現在の「武道」にしみついたイメージは多くの人々に固定観念を抱かせているからである。我々の流派も二代目の代まではいわゆる武道一筋わき目もふらずという形であった。しかし激動の'60年代後半は、我流派に誰の為の空手であり何の為の修業なのか、我我はどの立場に立たねばならないのかという鋭い問いかけをなしたのである。当初、和光大の一サークルとして出発した運動体としての信濃忍拳は、そのような中でさまざまな困難な道にぶつかってきた。他の武道界からの妨害もそうだが、我々自身にとってこの空手技術と思想政治領域の問題をいかに深化させ結合させるのかといった問題ほどしんどいものはなかった。ある時は左翼ガードマン的な姿に失望し、又ある時は死の商人的なイメージ（旗ザオを持っても凶器準備集合罪がかぶせられる御時世に、内ゲバの主武器にでもなったらそれこそ我々の運動の死を意味するであろう）に頭を悩ませ、ただひたすら手探りで前進していく中から

一、空手は敵権力に対する武器である！

一、全人民の総武装、総防衛を推進せよ！

一、すべての反革命武道界を解体・止揚せよ！

という流派三原則を産み出していった。このきわめてあいまいな表現は我々の運動の突破口である。この三原則をどのような形で深化させ実体化させていくかが、今後の忍拳運動の鍵になる事だけは間違いなさそうである。

女性拳士登場！

現在の信濃忍拳は、都内某所の中央道場を軸に、広く戦う労働者・市民・学生を集め、山谷・釜ヶ崎・京都・広島県等にも支部ができている。中でも女性拳士群の台頭は目を見張るものがある。拳の握り方ひとつとっても初めて来た女性で正確に握れる者は少ない。同じ時期に始めた男性に一カ月でだいぶ遅れを取ってしまう。しかしこれはあたりまえである。小さい時からスカートをはかされ、足をあげれば「はしたない」等と言われ、拳を握る事にも足一つあげる事にも抑圧を受け続けてきた女性は、自らの中にある怒りの表現すらをも奪われてきたのだから。その彼女等が習練の中からとりもどしていったそれぞれの暴力性は、すさまじいまでの迫力を持ち、又感動的である。そしてこの事は肉体的な弱者（病人・老人・女・子供・身障者）にとっても大きなはげましであろう。なぜならば彼女等は決してアマゾネスではないし、特殊な厳しい鍛練をしたわけでもない。執念の様なしぶとさを持ち合わせていただけなのである。もうひとつつけ加えておこう。武器も何もない山谷・釜ヶ崎の労働者が、彼等の生き血を吸い、こえ太ったヤー公共を弱者の強い団結で叩きつぶした事を。真昼間からナチス棒をふりかざし殴りかかってくる私服刑事共が、一年間も続いたきつい肉体労働の後の山谷道場・釜ヶ崎道場の迫力に、恐怖の念を抱きはじめている事を。

＊

無名者たちの悲哀と屈辱を
拳にあつくやきあげる
我ら　無数の手の群

信濃忍拳己修拳流空手群に結集するすべての個人、すべての戦線に忍拳通信〝手の群〟の刊行を宣言する。我々は個々に分断され支配されている現状を突破せねばならない。我我は個々人の戦い、問題、個別戦線の闘いをまずもって認識のうちに共有していく為にこの通信を生かしていこう。可視の敵を撃ち、そして不可視の敵を見すえたとき、我々の闘いは合流するだろう。

（「手の群」0号　発刊宣言より）

＊

この「手の群」に寄せられた釜ヶ崎労働者の文を二つ引用してみる。

＊

＜強者の〝弱い〟集団ではなく弱者の〝強い〟団結と組織を造り出そう！＞

強者とは誰だ。女ではなく男であり年寄りではなく若者であり、身体の不自由な者ではなくて「健康的」な者達である。肉体的には……。だがしかしもっとも重要なのは、いつの時代でも文字を書き言葉を知り自分と社会を語れる者達が、能書きをたれられる者達が〝強者〟となっていく。支配の要は差別と搾取である。人民を分断し結びつく事を断ち切る方策の下で搾取が行なわれるのだ。本来仲間であり兄弟である者達が、支配者の作り出したこの構造の中で対立しいがみあい、そして何よりも仲間であり兄弟である事すら知らずに死んでいく。――中略――闘う者だけが闘う強者の闘いはもろい。弱い者、力のない者、黙って死んでいく事を余儀なくされている者達に向けられる差別と分断と搾取の弾圧と抑圧は、身をもってはね返していかなくてはならない。暴動があるから犠牲があるのではない。労働者人民が犠牲にさらされている社会だからこそ暴動がおこるのだ。分断され差別されている者達、言葉や文字では自分を上手に表現できぬ者達、ただひたすら自分の身体に受ける苦痛の体験でのみ世の中を知り、他人を知り、黙ってのたれ死んでいかなければならぬ〝弱者〟こそ闘いの仲間となっていかなければならない。暴動は起こそうとして起こせるものではない。だからこそ、どんな権力者も支配の弾圧も、暴動を止める事はできないのだ。

（釜ヶ崎の一労働者より）

＊

＜人民の反撃の武器となれ（忍拳の同志に向けて）**＞**

「やられたらやり返せ」のスローガンは、山谷・釜ヶ崎に代表される流動的下層労働者の反撃の宣言である。ヤー公・ポリ公の直接暴力支配の中でやられ続けてきた労働者の、腹わたの煮えくり返るような憎しみは、これまで泣き寝入りさせられてきた者も、又個別に戦いを挑んできた者も、惨めな敗北と諦めを味わされてきた。労働者にはやり返す為の方法も武器も与えられてこなかったからである。「空手は敵権力に対する武器である」為には、このようなやられ続けてきた労働者・人民の情況に反映すべき技術・方法を提供する中からである。自らの肉体以外失うべき何物をも持たず、その肉体すらボロボロにされている者の側に身をおき、怒りと憎しみ、無念の死を生かすのかそれとも見すてるのか。「人民の総防衛」の思想的区別はここにある。殺られ続けてきた仲間の怨念を晴らす為には、これまで殺られ続けてきた分の何倍もの報復を

準備しなければならないし、もうこれ以上殺られない為にも武装する以外にない。武装は必ず殺られた人民の怒り憎しみに依拠してこそ初めて生命があるのだ。忍拳の任務は人民の生き生きした武装の契機となる事だと思う。

（釜ヶ崎の一労働者より）

強者意識を超えて

さてそろそろしめくくりにとりかかろう。今や全般的な傾向としてさまざまな〝暴力〟の中で免疫状態になっている我々にとって、もう一度暴力の持つ意味を問い返していく作業が必要なのではないだろうか。他人を殴るとか蹴るとかいう最も原始的な怒りの表現方法が持つ重みを、そしてその恐ろしさを自覚しない人間や集団の横行に空恐ろしさを感じるのである。秀吉の刀狩りと同様の状態の中で切り開かれてきた'67年以降の、人民の正当な暴力の行使の中にも大きな落とし穴があった様な気がする。世界最強を誇る警察機動隊に対し、我々がどんなに武器をエスカレートさせたところでその優劣は目に見えている。我々はあまりにも武器に依存しすぎてきたのではなかっただろうか。弾圧の集中砲火を浴び武装解除されていった時の無力感、弱さをどう受け止めてきたのだろうか。思想性や決意性だけで武器を握る手を強要してきた運動の、又机の上で軍事や武装を語る諸君の運動の弱さを見れば見るほど疑問が生じてくる。

我々にとって強くなりたいという願望はもっともであり、過去の戦いの中からもそれが出てくるのは必然的であろう。この数年間にどれだけ多くの労働者・市民・農民・学生が機動隊の暴力に傷つき殺されてきたのだろうか。ちょっとした習練が内臓破裂の大ケガを打撲だけで止どめられるのに……。そう思うと口惜しくてならない。忍拳を始めた諸君のほとんどがそれを痛感している。しかし我々忍拳が常にいましめなければならないのは、自らが肉体的な強さを持つ中で、無意識なうちに強者意識がつちかわれていく事であろう。我々があらゆる意味で強者としての要素を身につける事はそのまま、現在の差別と抑圧の構造の中に引きこまれていく事に他ならないからである。我々の三原則は確かに正しいと思う。しかしこれをあくまでタテマエとして終らせるのか、それとも個々の戦いの中で検証し更に深化させていくのかが今我々に問われている。少なくとも我々はすでに具体的な場を有し、汗を流し始めたのだ。我々にはそれを内部で検証しあいながら、すべての抑圧されている人民の前に提起し実践するという義務があるのだろう。

信濃忍拳は抑圧され虐げられ続けてきた人人の中で、今後どのような運動を作り出していくのだろうか。信濃忍拳の明日はどっちだ!!!

権力への憎悪が
無力な人民に武器を取らせた
支配者は己れの権力の座を守る為に
我々から武器と自由を奪い去った

果しなき権力への挑戦が
失なわれた自由を求める

自らの肉体を武器とした空手は
熱い怒りと叛逆の炎の中から産み出された